

## NEWSLETTER

No. 23

2010年6月20日

会長 山梨正明 事務局 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

京都工芸繊維大学 基盤科学系言語・文化部門 田中廣明 研究室内 Tel 075-724-7014(代表)

psj.secretary\_at\_gmail.com(\_at\_を@に変換) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

会員の皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか。日本語用論学会 Newsletter 第 23 号をお届けします。さる 4 月 18 日に龍谷大学にて、第 44 回運営委員会が開かれました。本ニュースレターは、運営委員会で話された方針に基づき、構成編集しております。

**会長再任のご挨拶** 山梨正明（京都大学教授）

**語用論学会と言語研究の未来に向けて**

語用論学会は、会員の皆さんの積極的な参加のお陰で、研究と学問的な交流の場を着実に広げています。実際の生きた生活の手段として使われる言葉は、コミュニケーションの手段であるだけでなく、思考力、判断力、創造力の源泉であります。この意味で、言葉の研究は、人間の知のメカニズムの解明につながる重要な学問分野の一つと考えられます。しかしながら、学問と社会との交流という視点からみた場合、人間の知の解明にかかわる言語研究の意義は、残念ながら社会的にはまだ十分に認識されていない現状にあります。このような現状を改善するという認識のもとに、日本学術会議（言語・文学委員会）からの働きかけもあり、今年の 4 月より、本学会を含む《言語系学会連合》（英語名 The United Associations of Language Studies: UALS）が、今年の 4 月 1 日に発足しました。言語系学会連合には、本学会をはじめ、日本言語学会、日本語学会、日本英語学会、日本語教育学会、等の 22 の学会が現在加盟しています。言語系学会連合は、「言語系学問およびその関連分野の調和ある発展を期し、加入学会独自の活動を尊重し支援しつつ加入学会間の連携を強化して、国際的協力関係を深めるとともに、社会的諸問題の解決への多面的な貢献」を目的とするもので、具体的には次のような活動を行うことになっています：(i)言語系分

野における諸領域の連携・協力の推進、(ii)他の学問分野との連携による学術水準の向上、(iii)言語系分野における国際協力の強化、(iv)言語系学問にかかわる成果の普及および施策の提言、(v)その他、本学会連合の目的を実現するために必要な活動。

これまでの言語研究は、研究者個人ないしは研究者の集団である学会によって進められています。しかし、言語研究は、個人や個別の学会レベルを超え、学会相互（ないしは関連学会の会員相互）の交流を図っていくことが重要です。そのためには、本学会だけでなく、学問的な関心や目的を共有する多くの言語系の学会が連携し、より高度の水準の学術的研究を目指していくことが必要です。

学会相互の連携は、社会的な観点からも求められます。自然科学系、工学系の分野と比べた場合、社会に対する言語系の研究の発達力は極めて限られているのが現状です。この発達力を考えた場合、語用論学会は（言語と社会、言語と文化、等、その研究内容のスコープの広さからみても）他の言語系の学会以上に、社会への貢献が期待できます。言語研究の重要性を一般社会に浸透させていくためにも、本学会の会員の皆さんの積極的な活動が不可欠です。私も次の任期の二年間、できるかぎり以上の目標の実現に向けて努力していく所存です。会員の皆さんの一層のご理解とご協力をお願い致します。

**追悼：小泉保先生**

昨年 12 月 18 日に、本学会初代会長を務められた小泉先生が逝去されました。本学会を代表して、久保進先生、東森勲先生、富永英夫先生が御葬儀に参列したほか、多数の会員が参列したとのことです。今回は、小泉先生との思い出を寄稿していただきました。

## 「博言学」としての知の探求

—小泉先生の学風—

山梨正明

人間的にも、学問的にも万人から愛され尊敬される学者が常に私達の傍にいて、私達を導き続けてくれることは幸せです。しかし、時として、人生は過酷です。小泉 保先生は、昨年（2010年）の12月に帰らぬ人となりました。小泉先生の学問的な業績、学界に残された足跡には計り知れないものがあります。先生のご研究は、音声学、正書法、文法論から語用論、北欧言語学まで多岐に渡っています。そのご研究のスコープの広さは、『音声学入門』（大学書林）、『日本語の正書法』（大修館）、『日本語の格と文型』（大修館）、『言外の言語学』（三省堂）、『フィンランド語文法読本』（大学書林）、『エストニア語入門』（大学書林）などのご研究から明らかです。また、小泉先生のご関心は、狭い意味での言語学にとどまりません。先生は、言語学の研究だけでなく、『カレワラ神話と日本神話』（NHK ブックス）、『カレワラ物語』（岩波書店）、『図説フィンランドの文学』（大修館）などの北欧文学のご研究でも多大な功績を残されています。（また、フィンランドと日本両国の友好関係維持に尽力され、2005年にはフィンランド共和国よりフィンランド白薔薇勲章騎士一級章勲章が贈られています。）小泉先生は、言語学の最先端を常に走り続けてこられました。先生は個人的に言語学についてのお話をする度に、「私の専門は言語学というより、むしろ博言学と呼びたい」と言われていたことを思い出します。「博言学」という言葉は、現在ではなじみのない言葉ですが、明治初頭における大学の言語系の学科は（「言語学科」ではなく）「博言学科」と呼ばれ、狭い意味での言葉の研究だけでなく、言葉の関連領域をも含む博物学的な視点からの研究がなされていました。小泉先生のご研究のスコープの広さ、ご学識の深さを考えた場合、先生は常に（狭い意味での言語学の研究ではなく）まさに「博言学」的な視点から研究を続けてこられた知の巨人と言っても決して過言ではないと思います。現在の言語研究は専門化し、とかく内閉的な研究になりがちです。小泉先生の「博言学」的な視点を継承し、言葉と関連領域の問題を広く見直しながら知の探求を続けていくことが、私たちの学問的な使命であると心に念じて研究を続けていきたいと思ひます。謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

## 小泉保先生を偲んで

児玉徳美

小泉先生と直接知り合いになったのは先生が1980年に大阪外国語大学へ赴任されてからである。初めは関西言語学会を通して、この10年余りは語用論学会の活動を介しておつきあいできた。いずれの学会でもいっしょにシンポジウムの発題者になったこともある。

先生はフィンランド語から縄文語に至るまでヨーロッパやアジアの多くの言語に通じておられ、音声学・統語論・語用論の研究書を世に出された。かつて博言学と呼ばれた一般言語学とともに言語理論もきわめておられ、多くのことを教えていただいた。一貫して文を最大の分析単位とする形式主義を批判され、言語の意味や機能を重視され、いち早く語用論に注目されたのも自然の成り行きであった。

小泉先生との交流の楽しみは研究に限らなかった。学会の運営委員会や大会の後には、先生を先頭に何人かの会員と共に近くの居酒屋に立ち寄り、談論風発で疲れ(?)をいやした。その場を見守る小泉先生には大人(たいじん)の風格があった。

1998年に創立の語用論学会では初代の会長として2005年度まで学会を先導してこられた。その後半期には副会長としてお手伝いできたことを感謝している。特に2004年12月甲南女子大学で開かれた第7回大会が思い出される。研究発表が行われていたとき、小泉先生から別室で学会の若返り策について相談を受けた。学会は創立時とほぼ同じメンバーで運営されており、学会刷新が望まれていた。その時、先生と二人でまず役員若返りの案づくりから始めることとし、会長は就任時に65歳未満とする現行の会長選挙規程の骨子をつくった。早速翌年の運営委員会に提案し、会員の同意を得て新しい会長を選ぶことができた。大会での懇親会では先生が1ヶ月ほど前に受賞されていた「瑞宝中綬章」を参加者に報告し、みんなでお祝いできたのも幸運であった。懇親会後は阪急芦屋川駅近くの居酒屋で数人と先生を囲む二次会となった。その夜は先生も私も重責から解放される方向が見え、いつもの酔いより深かった記憶がある。

言語研究をきわめ、人生を楽しまれた小泉先生のご冥福をお祈りします。

## 小泉先生の思い出：満面の笑顔と川柳

久保 進

小泉先生と言えば、ひとつにはお酒好きということでしょうが、私はどちらかと言えば下戸に近いほうですので、お酒の話は他の方にお譲りします。

私にとって、小泉先生の思い出といえば、やはり、「あの」笑顔でしょう。もちろん、酒席ではいつも満面の笑顔でいらっしゃいましたが、それは別にしまして、1998年の「日本語用論学会第1回大会」の記念講演で「川柳の語用論」と題してお話になった時の、自信に満ちた「あの」笑顔は忘れられません。先生は、前年に『ジョークとレトリックの語用論』（大修館書店、1997年）をお書きになったこともあり、川柳における笑いや可笑し味がどこからどのように生まれるかを語用論を駆使して、笑顔で説明されました。とくに、夫婦の秘め事に触れるような川柳のお話の時は、「照れるような」はたまた「それを楽しんでおられるような」絶妙な笑顔で講じておられました。私自身も、それまでにメタファーやシミリーなどのレトリックや皮肉について形式意味論やグライスの枠組みで取り組んだこともありましたが、先生のご講演はとても興味深く、納得できるものでありました。

ご講演の中では、柄井川柳の「子ができて川の字なりに 寝る夫婦」も分析の対象にされていました。先生がご存命で、『インターネット川柳』をご覧になると、「孫が来て 川の字に寝る 老夫婦」や「二人欠け 川の字変わり一」の字に」などの「川の字」を「お題」とした、多くのパロディや揶揄に満ちた現代川柳が溢れていることに驚かれます。

先生は他界されましたが、先生が先鞭をおつけになりました「川柳」の語用論的研究は、現代川柳の汪溢とともに発展し続けるものと思います。

私は、先生から直接ご指導を賜る機会には恵まれませんでした。ご著書の『日本語教師のための言語学入門』（大修館書店、1993年）と『音声学入門』（大学書林、1996年）は私の言語学と音声学の授業を長年支えてくれました。また、『入門語用論研究』（小泉保編 研究社、2001年刊）と『言外と言内の交流分野 小泉保博士傘寿記念論文集』（上田功、野田尚史編 大学書林、2006年刊）の執筆者の一人に加えていただきましたことは、私の誇りでもあります。ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたしております。（平成22年5月）

## 思い出の記

澤田治美

当時関西外国語大学国際言語学部・学部長であられた小泉先生から、「語用論学会を設立しようと考えているところですが、手伝ってくれないませんか」というお話があったのは、今から13年前の、1997年の6月頃のことだった。小泉先生は『言外の言語学 日本語用論』（1990、三省堂）を出版され、語用論の発展の必要性を痛感しておられたときである。

その後、京都駅近くのレストランで、有志が参集して、お酒を飲みながら、語用論学会のイメージや各自の専門分野などを話し合い、談論風発しとても楽しい会になった。あの時の小泉先生の楽しそうな笑顔が今でも浮かんでくる。

先生には学会発足から8年間会長を務めていただいた。よく、語用論学会は「家族的な雰囲気」の学会だと言われる。それは初代会長である小泉先生の学風の影響ではないかと思われる。他人にやさしく、自分に厳しく、常に努力と研鑽を怠らないという先生の人生哲学が投影されているからこそ、このようなアットホームな学会ができあがったのである。

先生は「大人(たいじん)」だった。皆、先生とお酒を飲みながら学問や人生の話をするのが好きであった。

中国語用論学会から招待されて、中国の蘇州大学で開かれた第7回中国語用論シンポジウムに参加したことも忘れ難い。小泉先生、余維先生、私と3人で2001年8月6日から10日まで蘇州に滞在した。「蘇州」とはあの「蘇州夜曲」の「蘇州」である。あのとき、先生は「ジョークの語用論」と題して基調講演をされ、中国の学者たちに大きな感銘を与えられた。先生のお人柄と学問が中国の語用論学会の何自然会長の心を捉え、何会長は2007年に関西外国語大学で開かれた日本語用論学会10周年記念大会で基調講演をしてくださった。これも先生のおかげである。

先生とは、研究室や京都から静岡に向かう新幹線の車内でたくさんお話をうかがうことができた。車内では、先生は日本酒を、私はビールを飲みながら、言語学談義をした。縄文語、テニエールの結合価、語用論、日本語の歴史、モダリティ、神話、フィンランド語など。先生からはどんな話題に関しても常に当意即妙の答えが返ってきた。語り合っていると、あっという間に静岡に着いたものである。

小泉先生と接して思ったことは、「学は人なり」である。学問のあり方は、人間性を反映し

ているように思われるのである。自分の人生の中で、小泉保先生という偉大な師に出会えたことに感謝せずにはおれない。

### 小泉保先生を偲んで

林 宅男

本学会の役員宛のメールで、「小泉保先生が2009年12月18日に84歳で急逝されました」との知らせを受けた時に、ただ愕然とし、深い悲しみで一杯になりました。それは、丁度、先般、澤田治美先生と余維先生がまとめて下さった『日本語用論学会10年の歩み』（『語用論研究』11号及び本学会のホームページに掲載）の原稿作成のお手伝いをするために、その関連資料や小泉先生のお写真を見ながら学会設立当初からの歴史を懐かしく思い出していた時期でもありました。小泉先生と初めてお会いしたのは1997年の6月に召集された日本語用論学会設立の準備会議の時で、それまでは、直接の面識はなく、先生は書き物等を通してのみ知る遠い存在の方でした。しかし、それ以来、長い間大変親しくしていただき、学問上のことに限らず多くのことをお教えいただきました。小泉先生と最後にお話したのは、昨年の秋でした。その時は、お電話でしたが、大変お元気そうなお声をされておられ、突然のこととは言え、もうお会いできないことが今でも信じられない気持ちで、本当に残念でなりません。

小泉先生は膨大な数の優れた業績と多くの立派な功績を残された大変偉大な研究者であることはここで申すまでもありませんが、告別式の際にいただいた小冊子（『天知る、地知る、我知る』）を見ますと、そこに記載されています170近くの論文のうちの約半数は還暦を迎えられた後に出版されたものです。また、22冊のご著書の殆どは還暦以降に（そしてその半数以上が古希を迎えられた後に、更に5冊は傘寿を過ぎた後に）執筆されたものであります。このことは、もう直ぐ還暦を迎えようとする私自身にとって、大変な驚きでありますとともに、重い意味を持つものであります。数年前に開かれた小泉先生の傘寿祝賀パーティーにお招きいただいた際に、同席されていました先生の奥様に、「小泉保先生はどのようにしてあんなに多くのすばらしいご研究を積み重ねてこられたのですか」とお尋ねしました。すると奥様は、「家では、夫はどんな場所でも、いつも勉強をしているようです」とお答えになりました。異なる分野の話ですが、最近、スペインの芸術家ピカソの絵画の一つが、芸術作品としては史

上最高価格で落札されたと聞きました。油絵・素描や版画の他、彫刻・陶器などでも、極めて多くの優れた作品を残したピカソは、ある日、妻のフランソワーズ・ジローから「そんなに長時間絵を書いていて疲れないの」と聞かれ、「私は創作の時は体を外へ置いてくる。イスラム教徒が祈る時、靴をぬぐように」と答えたそうであります。小泉先生は立派な体格をされていまして、体力にも恵まれておられたかもしれませんが、きっと、先生の、疲れを感じさせないほどの旺盛な研究意欲と探究心が、巨匠ピカソのように、絶え間なく、音声・音韻学、意味・語用論、統語論などの幅広い分野にまたがる創造的営みへと駆り立てたのではないかと思います。

ご存知のように、小泉先生の偉大さはそのご研究の面においてのみではありません。先生のお人柄、ご人格、お示しいただいたその生き方からは多くのことを学ばせていただきました。先生は日ごろ「人を見る目は厳しく、しかし心は優しく」とおっしゃっていたそうです。先生の生前のお写真を見てみますと、目の奥に秘められた厳しいまなざしと柔軟なお人柄が確かに伺えると共に、そのご人格と生き方が懐かしく偲ばれます。小生にとって小泉先生は、言わば、「雲の上の人」のような存在ではあります。今後は、先生が我々に残してくださった有形・無形の多く財産を通して先生から教養を請い、対話をさせていただきながら、少しでももっとお近づきになりたい気持ちでいます。小泉先生、長い間、いろいろとご指導いただき本当にありがとうございました。

### 小泉先生の思い出

東森 勲

小泉先生とはじめてお会いしたのは、学会発足の集まりでした。何事にも温厚で学者ぶらなくて、語用論が必要な学問であるということをよく口に出されていたことを思い出します。講演会でも得意な川柳などを次々に披露され、俳句とか川柳の世界と語用論との接点を楽しんでおられる様子が印象的でした。小泉先生の記念論文集にも書かせていただき、ありがたかったですし、フィンランドでつくられたムーミン・カップをいただき、いまでもありがたく、愛用させていただいています。ばくも何度かフィンランドを訪れたことがあるので、小泉先生のカレワラの翻訳など、これから読ませていただくのを楽しみにしています。長い間、会長をして

いただき、学会あるのも先生のおかげと思っています。

お葬式ではお孫さんからのおじいちゃんについて、やさしくて、いいおじいちゃんであったということが印象的で、学者としての側面と、暖かい家庭のささえがあったからこそ、小泉先生の研究もはなばなしく、多くの研究成果となって現れたのでしょう。学問だけでなく、魅力的な人間ということも、学ばせてもらったような気がします。ありがとうございました。

(2008-2009 事務局)

## 我知る学問の尊さ

林 礼子

『天知る、地知る、我知る』これは先生のご経歴とご著書の一覧が記載された立派な上製冊子につけられた題目です。「言葉の道を幾星霜」と副題が付けられています。二〇〇四年十二月十一日に開催された第七回日本語用論学会の懇親会でいただきました。その時先生は、これは後漢書の話からのもので「天知る、地知る、我知る、人知る」と「人知る」が入るのですが、「我知る」までにしましたとお話してくださいました。この成語は、悪事を持ちかけられた「我」が悪事を持ちかけたその「人」を戒める言葉です。「あなたは誰も見ていないのだからいいのではないかと言うが、天地が見ているのではないか、我も見ている、それを仕掛けているあなたも見ているのではないか」と。先生は、「正直で正しく行いをしなさい、人が見ているからですというだけではなく、我が見ているからですというつもりでつけました、それは学問をすることについても同じだという思いです」と話されました。先生は、人には寛大でやさしい温なお顔を向けられますが、ときおりくるりとした眼から鋭い光を放たれました。毎晩必ず読書をするという習慣を守り研究をしているとおっしゃっていましたが、その鋭い眼光はご自分の学問に向けておられたのではないかと拝察しております。学問に向かう私の仕事を天と地が見ている、そしてその仕事を我が一番よく見ているとお考えになって精進しておられたのではないかと。

先生は、ご自分が課された使命を生ききるために信念をもって最後の最後まで研究を続けられ、天寿を全うされました。私のような未熟なものにも優しく接してくださいました。とことん探究しなさい、ごまかしのない研究をしなさい、その努力が尊いのですよ、とお姿で示し

てくださいました。先生の「天知る、地知る、我知る」の意味を座右の銘とし励んでまいります。ほんとうに有り難うございました。ご冥福を心からお祈りいたしております。

## 小泉先生との思い出

高司正夫

小泉先生に頼まれて、語用論学会第一回総会で司会をしたことを思い出します。当日はあいにくのつく雨の悪天で、「雨降って地固まる」という言葉で司会を始めたことを覚えています。夜の懇親会では、先生からねぎらいの言葉をいただきました。私の名前「高司」は比較的珍しいのですが、その由来について詳しく教えてくれました。先生の学識の深さに改めて感銘を受けたものです。

先生はいつも慈愛に満ちた表情を浮かべ、感情をあらわにした表情を見たことがあります。先生の間味は戦争中、苦しい青年期を過ごした経験から生まれたのではないかと想像されます。 合掌

## 〈 事務局より 〉

### 事務局の移転について

2010年4月より、事務局が龍谷大学から京都工芸繊維大学に変わりました。新事務局体制となりました。よろしく願いいたします。(田中記)

新事務局：〒606-8585

京都市左京区松ヶ崎御所海道町

京都工芸繊維大学 基盤科学系言語・文化部門  
田中廣明 研究室内 Tel 075-724-7014(代表)

E-mail: psj.secretary\_at\_gmail.com(\_at\_を@に変換)

### 新規運営委員について

2010年4月よりの運営委員の一覧表です。\*印は新規役職。

### (執行部)

- |         |         |
|---------|---------|
| 1. 会長   | 山梨 正明   |
| 2. 副会長  | 久保 進    |
| 3. 事務局長 | * 田中 廣明 |

### 事務局補佐

\* 野澤元、Lawrence Schourup

会計 \*高木 佐知子

\*野澤元

(編集部)

4. 編集委員長 林 宅男

副委員長 \*Lawrence Schourup

編集委員 澤田治美、林 礼子、\*森山卓郎、\*中村芳久

(大会運営部)

5. 大会運営委員長 \*西光 義弘、

大会運営副委員長 (企画) \*東森勲、\*五十嵐海理

大会運営副委員長 (実行) \*小山哲春、\*富永英夫

企画委員 \*平塚 徹、森山由紀子

実行委員 鈴木光代、長友俊一郎、春木茂宏

プロシデイング 余 維、長友俊一郎

(事業部)

6. 事業委員長 林 礼子

事業副委員長 平塚 徹

事業委員 \*井上 逸平、\*内田 聖二、\*西山 佑司、高司正夫

(広報部)

7. 広報委員長 \*山口 治彦

広報副委員長 (Newsletter) \*加藤 重広

広報委員 (HP) 金丸敏幸、\*加藤 重広、

第12回大会総括(於・龍谷大学)

Horn 先生、Haberland 先生の2つの講演と、英語発表8件、日本語発表19件、懇話発表3件、ワークショップ5件、ポスター発表22件で、参加者(発表者を含む)は206名で大盛況のうちに参会しました。特に、熱心に発表・参加していただいた会員の皆様、すばらしい講演をしていただいた Horn 先生と Haberland 先生には厚くお礼を申し上げます。

第12回(2009年度大会)会計報告

収入	
大会参加費および資料費 (現会員:157名×2,000=314,400)+当日会員:49名×3,000=147,000)	46,1000
懇親会費(73名×4,000)	292,000
龍谷大学	288,000
合計 A	1,041,000
支出	
講師謝金(Horn先生、ハーバーランド先生)	100,000
渡航費(Horn先生)	170,000
大会ポスター・プログラム・論文集代	471,450
アルバイト代(18名×15,000)	270,000
懇親会費	240,000
会議費	100,000
印刷代(Harberland先生講演会用)	7,200
文具代	9,064
お茶代	13,422
合計 B	1,381,136
A - B	▼ 340,136

平成20年(2008年)度会計報告(平成20年4月1日~平成21年3月31日)(平成21年12月5日総会承認)

収入 前年度繰越残高 3,253,920

年会費 1,964,000

振込み分(408口)

一般	320 口(@5,000)	1,600,000
学生	84 口(@4,000)	336,000
団体	4 口(@6,000)	24,000
大会当日	1 口(学生 1 口)	4,000
大会参加費		386,000
現会員	145 口(@2,000)	290,000
非会員	32 口(@3,000)	96,000
「語用論研究」等バックナンバー売り上げ		41,500
懇親会費		312,000
松山大学		500,000
松山コンベンション協会		300,000
その他		28,000

合計 6,785,420

## 支出

印刷費(ニュースレター・大会プログラム・プロシーディングス・学会誌)	1,199,124
郵送費	162,120
事務局諸費	735,069
人件費(学生アルバイト)	342,400
会議費	125,757
文具費	97,953
その他	168,959
研究会助成金	60,000
講師謝金等	330,000
懇親会・会場のお茶代	294,140

合計 2,780,453

次年度繰越金 4,004,967  
(平成 21 年度の会計報告は、本年度大会の総会での承認後正式にお知らせします)

## 2009(平成 21)年度予算(案)

\* 大会が 12 月に開催されます関係上、当該年度の予算(案)を年次大会の総会でお諮りしております。

## 収入

年会費	1,930,000
(5,000 円 × 300 = 1,500,000)	
(4,000 円 × 100 = 400,000)	
(8,000 円 × 5 = 30,000)	
龍谷大学	300,000
大会参加費(2,000 円 × 1503,000 円 × 30)	

	390,000
「語用論研究」、バックナンバー売り上げ	40,000

合計 2,660,000

## 支出

印刷費(Newsletter, プログラム, Proceedings, 学会誌)	1,100,000
郵送費	200,000
事務局費	360,000
大会経費(文房具、講師渡航費・謝金等、アルバイト代、会場費、雑費、懇親会費など)	1,000,000

合計 2,660,000

以上、平成 21 年 12 月 5 日総会承認

## 会員情報確認のお願い。

本学会では、会員の皆様の情報を再確認させていただくことになりました。つきましては、同封の別紙に、皆様方個人の会員番号、お名前、ご住所、電話番号、所属、メールアドレス、昨年度の会費納入状況などを記した別紙を同封させていただいております。記載事項に間違いのある場合、あるいは訂正をされる場合などは、お手数ですが、事務補佐・野澤まで必ずメールでご連絡ください。メールアドレスは、psj.assistant\_at\_gmail.com(\_at\_を@に変換)です。正しい情報の場合は、メールでのご連絡の必要はありません。将来的に本学会としては、事務の簡素化のための外部委託、また、会員の皆様で構成するメイリングリストの構築を考えております。そのための再確認とさせていただきたく思います。なお、いただいた情報は、個人情報保護にのっとり、決して外部には出さないようになっておりますので、ご安心ください。また、今後も会員名簿を作る予定はありませんので、ご安心ください。

## 会費納入のお願い

同封の振替用紙で、今年度の会費をお払いください。一般 5,000 円、学生 4,000 円、団体会員 6,000 円となっております。また、上記の別紙に昨年度の会費納入状況が書かれております。空欄の方は、未納の方ですので、今年度の会費とあわせて、お払いいただけたらと思います。

## 入退会希望、住所などの変更について

これらについては事務局長田中あてにメール(psj.secretary\_at\_gmail.com)(\_at\_を@に変換)で、お知らせください。特に、住所変更につきましては、

振り込み用紙だけでご連絡をいただくと、文字がカすれて読めない場合がありますので、メールでのご連絡をいただけたらと思います。

### 第13回大会発表募集のお知らせ

2010年度の第13回大会は、以下のとおり開催されます。ふるってご参加ください。

日時：2010年12月 4日(土)～ 5日(日)

場所：関西大学

(<http://www.kansai-u.ac.jp/index.html>)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

TEL 06-6368-1121 (大代表)

第13回大会の基調講演は、Malcolm Coulthard 先生(Aston University, Birmingham, UK)を予定しております。タイトルはまだ未定ですが、「言語と法律(Language and Law)」(予定)を考えられているとのこと。氏の業績その他詳しくは、<http://www1.aston.ac.uk/lss/staff/coulthardm/> をご覧ください。先生は、著名な機能言語学者、会話分析、さらに法言語学者としてもご活躍されています。

また、Coulthard 先生を特別指定討論者にお迎えし、以下のようにシンポジウムも企画しております。

### 日本語用論学会第13回大会シンポジウム概要

日時：2010年12月5日(日)(午後2時前後の予定)

場所：関西大学

テーマ(仮)：「言語機能からとらえた語用論の展開」

司会：児玉徳美

コメンテーター：Malcolm Coulthard (Professor of Aston University, UK)

1)「選択体系機能文法(SFG)」と語用論- ハリデー言語学の観点から

(講師：龍城正明 <同志社大学教授>)

2)「テキスト言語学」と語用論-「結束性」の観点から

(講師：庵 功雄 <一橋大学准教授>)

3)批判的談話分析(CDA)と語用論-社会的言語機能の観点から

(講師：林礼子 <甲南女子大学教授>)

シンポジウムの趣旨：

語用論研究は、言語をそれが実際に使用されるコンテキストの中で機能的に捉えることを一つの基本的な姿勢とする。この言語分析のアプローチは、1920年代に Mathesius を中心に

創設されたプラグ学派の機能主義の分析方法の流れを汲むもので、その後、文レベルの文法に基盤を置く構造主義言語学の伝統に基づく形式主義的な言語研究に異を唱える形で発展してきた。以後、多くの言語理論がその影響を受けて提唱されたが、本シンポジウムでは、次の三つについて検討する。

1) 1950年代からロンドン学派の Halliday らによって機能主義言語学理論として開発され、後に、言語形式を様々なコンテキストにおける「選択」という観点に基づいて展開された「選択体系機能文法 (Systemic Functional Grammar)」。

2) テキスト言語学の中心的位置を占めるもので、テキストの形成に関わる様々な機能的要素の内、特に Halliday & Hasan(1976)によって指摘された「結束性」に基づき、テキストを対象として文法現象を研究する「テキスト文法 (text grammar)」

3) Foucault や Habermas らの社会理論の影響を受け言語使用を権力やイデオロギーの観点から分析することを目指して、1970年代後半から1980年代にかけて Fowler らや Fairclough を中心に提案された「批判的談話分析(CDA)」(「クリティカル言語学(CL)」)。

ここでは、3人の講師にそれぞれの言語理論が拠って立つ言語機能の観点と分析方法について述べていただき、その相違点、共通点、問題点などについて明らかにすると共に、それらが今後の語用論研究の一層の進展にどのような貢献をもたらすかについて建設的な議論を行う。

### 発表募集のご案内

「研究発表」、「ワークショップ」、「ポスター発表」の発表者を募集します。会員の皆さま、ふるってご応募下さい。なお、今年度は、発表原稿の送付先(メール宛先とも)が変更となりましたので、ご注意ください。

以下に応募要領を示します。

応募締切：2010年8月20日(水) 必着

応募宛先・問合せ先

小山哲春(大会運営副委員長)

メール：[psj.presentation\\_at\\_gmail.com\(\\_at\\_を@に変換\)](mailto:psj.presentation_at_gmail.com(_at_を@に変換))

郵送の場合：京都ノートルダム女子大学 人間文化学部 小山哲春研究室 日本語用論学会大会副委員長

〒606-0847京都市左京区下鴨南野々神町1

TEL: 075-781-1173 (代表)



(応募・問合せは、極力、メールでお願いします)

なお、今年度から「審査希望分野」(以下参照)を記入していただくこととなりました。円滑な査読審査のためのものです、ご協力ください。1~10にご自身の分野が見あたらない場合には、どのような分野でもその他にご記入いただいて結構です。

さらに、発表内容を一番よく表しているキーワードを5つ以内で、つけていただくこととなりました。

#### 発表形態

研究発表：発表25分+質疑応答10分

ワークショップ：1時間40分、一定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募。

ポスター発表：1時間40分(掲示時間)

#### 発表言語

日本語もしくは英語。応募書類に必ず明記してください。

#### 応募原稿の体裁

1ページにつき25文字×30行で、参考文献は文字数に含めません。

研究発表：3ページ以内

ワークショップ：全体説明2ページ以内、各発表1ページ以内

ポスター発表：1ページ以内

#### 電子メールでの応募について

以下のとおり形式を統一します：

(ア)メールの件名では、「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の別を明記する。例：【語用論学会：研究発表(小山)】。

(イ)応募原稿は、Microsoft Wordで作成し、添付ファイルにて送る。

(ウ)応募原稿は、A「個人情報ファイル」とB「発表要旨ファイル」の二つのファイルからなる。

(エ)Aのファイル名を「個人情報(X).doc」、Bのファイル名を「研究/ワークショップ/ポスター発表要旨(X).doc」とする。Xの部分には(代表)応募者の姓を入れる。例：「個人情報(小山).doc」「ワークショップ発表要旨(小山).doc」

(オ)一つの応募メールにこの二つのファイルを添付する。

(カ)ワークショップの応募については、代表者が発表者の個人情報および発表要旨をそれ

ぞれ一つのファイルに取りまとめる。

(キ)メールの本文には、添付ファイルA「個人情報ファイル」の内容と同じ個人情報を貼り付ける。

(ク)A「個人情報ファイル」は、以下の書式とする。

発表形態：(「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」のいずれか)

題目：XXXX

発表言語：日本語/英語の別

氏名：XX XXX (ふりがな)

所属・職名：XX大学XX学部 および教授/准教授/大学院生などの別

住所：〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号：xxx-xxx-xxxx

ファックス番号：xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス：xxxxx@xxxx

#### 審査希望分野：

1. 直示・指示
2. 前提・推論
3. 発話行為
4. ポライトネス
5. 会話分析・エスノメソドロジー
6. 談話分析
7. 認知意味論・レトリック
8. 語用論と文法研究
9. 語用論と教育
10. 関連性理論
11. その他( )

審査希望分野は、次の1から10の中から1つないし2つ選んでください。1~10になければ「11.その他」に詳しくお書きください。

発表論文のキーワード(5つ以内)

#### 通常郵便での応募について

電子メールでの応募の場合と同じ要領で原稿を作成してください(特に、上記(ウ)(ク)を参照ください)。したがって、A「個人情報ファイル」とB「発表要旨ファイル」の2種類の書類を用意していただきます。

電子メールでの応募と特に異なる部分は以下のとおりです：

(ア)用紙はA4を用いる。

(イ)発表要旨には氏名を書かない。

(ウ)封筒の表に、「研究発表応募」、「ワークショップ発表応募」もしくは、「ポスター発表応募」と朱書する。

応募先は、上記、小山哲春宛にお願いします。

#### 応募条件

発表応募者は会員に限ります。応募者が会員でない場合、必ず応募と同時に入会の手続きをしてください。入会方法は、<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/> を参照。

### 応募者への通知

応募書類を受理後、(できるだけ)1週間以内に受理確認のお知らせをメール(もしくは葉書)にて発送します。連絡なき場合は、お問合せ下さい。

選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は10月以降のなるべく早い時期に応募者に通知します。

**今回も、第12回大会に引き続き、日本語での発表に加えて英語の発表も受け付けますので奮ってご応募ください。**

### Call for Papers for the 13th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan.

- Date: Dec. 4<sup>th</sup> and 5<sup>st</sup> 2010
- Place: Kansai University, Osaka, Japan
- [http://www.kansai-u.ac.jp/English/about\\_ku/locaction.html](http://www.kansai-u.ac.jp/English/about_ku/locaction.html)
- The deadline for submitting abstracts: August, 20<sup>th</sup>, 2010
- Notification of the result of selection: by October

We are pleased to announce that the Pragmatics Society of Japan is accepting an application of paper presentation for 13<sup>th</sup> Annual Conference to be held at Kansai University in Osaka Prefecture on Dec. 4<sup>th</sup> and 5<sup>st</sup> of 2010. Please note that applicants should specify the area of the presentation and the language(English or Japanese) you are going to use in the presentation, and give 5 key phrases which may characterize the paper.

**The Special Lecture** will be given by the invited speaker, Dr. Malcolm Coulthard, Aston University, UK). We also planning to organize a special symposium, spoken by three invited speakers and a designated discussant, titled "Pragmatics from Language Function."

### Submission of Abstract:

Abstracts for paper presentation are invited on any aspects of pragmatic analysis from a variety of fields, including historical pragmatics, cognitive pragmatics, interface of pragmatics and other disciplines, interlanguage pragmatics, social pragmatics, comparative or contrastive pragmatics studies. All abstracts (which must be

in English) must be submitted electrically, as attachment files in MS Word format (and if possible in PDF format) to the following address: [psj.presentation\\_at\\_gmail.com](mailto:psj.presentation_at_gmail.com)

### The guidelines for abstract submission:

1. Authors should not include their names or otherwise reveal their identity anywhere in the abstract title.
2. The length of an abstract should be approximately 500 words, not including references, figures, and/or graphs. The maximum length of the abstract is two pages.
3. The (principal) author's full name must be used as a filename.
4. The body of the e-mail message must contain the following information:
  - a. title of a paper
  - b. name(s) of author(s) ( Please write your family name in BOLD LETTERS )
  - c. affiliation(s) of author(s)
  - d. e-mail address(es) of author(s)
  - e. postal address of the (principal) author
  - f. type of paper presentation: lecture, or poster, or workshop (accepted only for a group application with three or four presentations)
5. The header (subject) of the e-mail should be "Abstract Submission for 11<sup>th</sup> Annual Conference of PSJ".
6. To ensure proper review, applicants are asked to specify the area(s) of pragmatic research addressed by the paper, by choosing one or two from the list below:
  1. deixis and reference
  2. pragmatic inference
  3. speech act
  4. politeness and socio-linguistic approaches
  5. cognitive linguistic approaches
  6. relevance theory
  7. pragmatics and grammar
  8. discourse analytic approaches
  9. CA , ethnomethodology
  10. historical pragmatics
  11. others
7. Applicants are also asked to give 5 key phrases which may help characterize the paper.

### Contact Person:

Tetsuharu KOYAMA  
 Kyoto Notre Dam University, Center for International Programs (1, Minami-Nonogamicho, Shimogmo, Sakyo-Ku, Kyoto 606-0847, Japan,  
 Tel:+81-75-781-1173  
 E-mail: [psj.presentation\\_at\\_gmail.com](mailto:psj.presentation_at_gmail.com)

## 『語用論研究』第12号投稿募集

学会誌『語用論研究』では、会員の皆様の投稿をお待ちしています。投稿は随時受け付けておりますが、査読のため3月末日を一応の区切りとしています。

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)
2. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同時に複数の論文を投稿することや、同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かるような書き方は避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿は1年中受け付けるが、当該年度の号の最終投稿締め切りは、毎年3月31日とする。
5. 採否決定を9月末日頃とする。
6. 枚数、書式など。
  - a. 原稿枚数：A4、横書き、20枚以内(注、参考文献を含む)
  - b. 書式：1ページ、日本語の場合は32行38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
  - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケでアブストラクト(英語で、1行70ストローク、8行以内)、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名、謝辞を書かない(掲載決定後に編集委員会より指示する)
  - d. 例文の前後は1行アケル。
  - e. 各節の前は1行アケル。
  - f. 注は、1, 2, 3のように、括弧を用いない数字だけとする。
  - g. 見出しのサブセクション番号は、1.1.のように、数字の後にピリオドを置く。
  - h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1. ではじめる。
7. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
8. 参考文献(参考文献、引用文献という言い方はしない)の書式は以下の例にならう。
 

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in

Discourse." In T. Givon (ed.) *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京：三省堂。

無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」坂本 昂 (編) 『思考・知能・言語』(現代基礎心理学)、第7巻、161-189、東京：東京大学出版会。

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、『言語』24: 2 (2月号) 62-69.

\*ed. ではなく(ed.)と標記する

9. 参考文献に関する注意事項
  - a. 参考文献は本文中で引用したもののみとする。
  - b. 英語の文献、日本語の文献を混在させて、アルファベット順に並べること(別々に分けない)。
  - c. 共著者の場合、英文は & を使わず and、日本語は・(なかぐろ)とする。
  - d. 雑誌については日本語、英語とも、巻数、号数、ページ数を明記する。
  - e. 英語の文献名で、語頭については、内容語は大文字、機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字で、あとは小文字という形式はとらない(上記8の英語の参考文献の書式参照)。
  - f. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて、本人と分かるような書き方をしない。
10. 提出部数：原稿は6部提出する。(コピーで可)
11. 抜き刷りを希望する場合、費用は執筆者の負担とする。
12. 執筆者構成は初校のみとする。校正の際の内容にかかわる原稿への加除は認めない。
13. 「原稿ファイル」とは別に、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレスを記載した「個人情報ファイル」を作成する。この二つのファイル共、ワード及びPDFの両方で作成する。
14. 送付方法と送付先：
 

「原稿ファイル」及び「個人情報ファイル」を下記宛て送付する。送付は、1)ファイルを添付した電子メールか 2)ファイルを保存したフロッピーディスク等の(書留)郵送のいずれかとする。

送付先：

(電子メールによる場合)

psj-sip\_at\_andrew.ac.jp (注意: \_at\_を半角の@に置き換えて下さい)

(『語用論研究』編集委員長 林宅男)

(原稿送付の際は、確実に受信できるように、出来るだけ無料メールアドレスのご使用をお控えください。)

注意: 電子メールによる送付の場合、送信後、2週間経っても、原稿を受理した旨の確認返信メールが無い時には、必ず、こちらからの確認返信メールがあるまで、takuo\_at\_kcc.zaq.ne.jp (\_at\_を半角の@に変換)に連絡してください。(郵送による場合)(「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学 林宅男

TEL (0275)54-3131 Fax (0275)54-3202

15. 掲載決定後に、最終原稿を3部上記の宛先に郵送し、同時に最終原稿の添付ファイルを、上記のメールアドレスに送付する。提出原稿は原則として返却しない。

### The Style Sheet of English papers for *Studies in Pragmatics*

#### 1. Manuscripts

- a. All manuscripts should be submitted on A4 size paper.
- b. Manuscripts for papers should be no more than 20 pages in length, excluding references and footnotes.
- c. Type in 12-point font, 32 lines to a page.
- d. Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm on the top and bottom.
- e. For authors whose native language is not English, it is advisable that, prior to submission, manuscripts be corrected and edited by a qualified native speaker of English.
- f. Authors are responsible for the first proofreading only. Corrections should be limited to typographical errors.
- g. Authors will receive 20 offprints of their articles.
- h. On a separate coversheet, please indicate the title of the paper, author's name, e-mail address, affiliation & position, and postal address. Authors are requested to submit the manuscript file and the coversheet file in both WORD format and PDF format by e-mail or by regular mail.  
(If, after submitting a manuscript by e-mail, you do not receive confirmation of receipt of your manuscript within two weeks, please send an e-mail message requesting such

confirmation.)

- i. If submitting by regular mail, save the manuscript file and coversheet file on a floppy disk or other storage medium and send by a registered mail.
- j. Address where the manuscripts should be sent:  
e-mail:  
psj-sip@andrew.ac.jp  
(Dr. Takuo Hayashi, chief editor for *Studies in Pragmatics*)  
Regular mail:  
Dr. Takuo Hayashi  
(chief editor for *Studies in Pragmatics*)  
Momoyamagakuin University (St. Andrew's University)  
1-1, Manabino, Izumi city, Osaka, 594-0004, JAPAN
- k. Submission deadline: Submissions are welcome at any time, but manuscripts for a given year's issue must be received by June 20 of that year. Submissions received after that date will be considered for the following year's issue. Submitted papers are refereed and authors are notified of the results around the end of September.

#### 2. General Format

Abstracts:

- a. Abstracts should be not more than 8 lines (about 100 words) in length.
- b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract itself should be preceded and followed by two blank lines and should begin with the word 'Abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by 'Keywords'.

The Main Text of the Paper:

- a. The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0. Subsection numbers should be followed by a period (e.g., 1.1.).
- b. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

Notes:

If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list. Notes should be indicated with Arabic numerals (1, 2, 3, 4) without parentheses.

References:

- a. References should be typed at the end of the

- paper.
- b. Cite only works quoted or referred to.
  - c. The titles of books and articles originally written in Japanese should be transcribed in Roman letters and supplemented by English translations in brackets.
  - d. The format for references (including order of elements and punctuation) should be consistent with the following examples:

- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.
- Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.
- Koizumi, T. 1990. *Gengai no Gengogaku: Nihongogoyoron* (Linguistics of Implied Meaning: Japanese Pragmatics) Tokyo: Sanseido.

**第 12 回大会で発表された方へのお知らせ**  
 (原稿の提出方法,原稿提出の締め切り,送付先等についての追加のお知らせ)  
 (日本語で発表された方用)  
 第 12 回『大会発表論文集』(Proceedings) (第 4 号)

掲載論文原稿執筆のお願い。

日本語用論学会では、2005 年度より、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『大会発表論文集』を発行しています。つきましては、大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」で、発表されました皆様には、以下の要領で原稿を提出していただくこととなりますので、予め、お知らせいたします。

#### 1. 執筆規定

1. 用紙・枚数: A4 用紙、横書き。「研究発表」は 8 ページ以内、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」は 4 ページ以内(注: 要旨、参考文献を含む)。字数は自由。

#### 2. 書式:

- a. 余白は上下 30mm、左右 25mm とする。1 行文字数、行数、段組などは自由 (ただし、文字のサイズは極端に小さくしないこと)。
- b. 原稿の 1 ページ目には、タイトル、氏名、所属(E-mail アドレスは任意)を記し、そのあと 2 行開けて要旨、本文を続ける。

- c. 「はじめに」または「序論」の節は 0. からではなく、1. から始めること。
- d. 例文の前後は 1 行、各節の前は 1 行開ける。
- e. 注を付ける場合は、巻末とし、本文と参考文献の間にまとめて入れる。
- f. 参考文献のフォーマットは『語用論研究』の執筆要領に従うこと(本学会のホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/> 参照)。

#### 3. 要旨:

- a. 要旨は(日本語での論文も含め)全て英語によるものとし、約 100 語で書く。
- b. 要旨は <Abstract> とページの左上に記し、原稿の 1 ページ目には、タイトル・氏名・所属と要旨を記すこと。

#### 4. キーワード

- a. 要旨の下に【キーワード】: 或いは【Keywords】:と明記して、日本語の論文は日本語で、英語の論文は英語で、5 個以内を添えること。
- b. キーワードと本文との間は 2 行アケとすること

#### 2. その他の注意事項

- a. 執筆者は、前年度の大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」での報告者に限る。
- b. 内容は、大会発表に沿ったものとする(但し、必要な修正を施すこと)。
- c. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
- d. 『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。
- e. 別のカバーシート用紙 (A4)に次の事項を記入して提出すること:
  - 「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」のいずれであるか。
  - 発表論文タイトルと発表者名(日本語) 氏名(ふりがな)
  - 発表論文タイトルの英語訳と発表者名のローマ字表記。
  - 連絡先: E-mail アドレス

3. 原稿提出の締め切り: 2008 年 8 月 20 日(時間厳守)

4. 原稿の提出方法: 論文の原稿は、カバーシートと合わせて、電子メールで、ワードによるファイルと PDF によるファイルの両方を添付で送付する。

5. 送付先: snagato\_at\_kansaigaidai.ac.jp( \_at\_

を@に変換) (長友俊一郎)  
 (『大会発表論文集』編集担当: 余 維・長友俊一郎)

□ **Announcement to Presenters at the 12th Annual Conference**

(Additional information on the deadline, method & address of submission)

Request of submitting the manuscripts for the proceeding of the 12th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan(PSJ) (Vol.4)

[For participants who presented papers in English]  
 Since 2005, the Pragmatics Society of Japan has been publishing presentations given at its Annual Conference for publication in a volume of proceedings. The following are instructions for use in preparation of manuscripts by those who have presented their work at the Conference as lecture presentations, in workshop, or in poster sessions.

Instructions for Preparing Manuscripts

1. Writing requirements

1. Paper and length

All manuscripts should be submitted on A4 size paper. Manuscripts for lecture presentations should be no more than 8 pages in length. Workshop and poster presentation should be no longer than 4 pages. Please note that these length restrictions include the abstract and the reference list. There is no restriction on the number of words or characters per page.

2. Format.

a. Margins: top and bottom, 3 cm; right and left, 2.5 cm. Number of lines per page, number of characters per line, and line spacing are not restricted (however, extremely small characters should not be used).

b. The first page of the manuscript should begin with the title, the author's name, and the author's affiliation (e-mail address optional), followed, after two blank lines, by the abstract and the main text.

c. The introductory section or prefatory remarks should be numbered 1, not 0.

d. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

e. If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list.

f. References should follow the style sheet of Goyoron Kenkyu (Studies in Pragmatics) (see the homepage of PSJ <http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

3. Abstracts

a. All abstracts should be written in English and should be about 100 words in length.

b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract should begin with

the word 'abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 key words should be given below the abstract, preceded by '【Keywords】'. [Refer to the figure below.] Main text should be preceded by two blank lines.

2. Other important points.

a. All contributors must have given a lecture presentation, a workshop presentation, or a poster presentation at PSJ's 10th Annual Conference of the Society.

b. Aside from necessary corrections, manuscript contents should be faithful to the content of the presentation actually given at the Annual Meeting.

c. As a general rule, manuscripts should be written in either Japanese or English.

d. Extended versions of papers which have appeared in the Proceedings may be submitted for review to PSJ's Journal Goyron Kenkyu (Studies in Pragmatics). In that case additions and corrections should be made to the original manuscript.

e. On a separate (A4) coversheet, please indicate the following information:

i. Whether your presentation was a lecture, a workshop presentation, or a poster presentation.

ii. The title of your paper and your name.

iii. Your e-mail address.

3. Deadline of the manuscripts

The manuscripts must be received by August 20th, 2010 (late submission is not accepted).

4. Method of submission

The manuscripts, together with the coversheet, must be sent electronically, as attachment files in both MS Word format and PDF format. Use (the principal author's) name as a filename.

5. Address to which manuscripts should be sent:

Snagato\_at\_kansaigaidai.ac.jp (Mr. Yuichiro Nagatomo)

(Editorial committee of the Proceedings: Wei Yu, Yuichiro Nagatomo)

**言語系学会連合へ正式加入手続きについて**

会長再任挨拶でもふれられ、ホームページ上でもお知らせしていますが、本学会は、本年4月より「言語系学会連合」に参加することになりました。詳しくは、以下のサイトをご覧ください。 <http://www.nacos.com/gengoren/index.html>

**PLL18 (Pragmatics and Language Learning) July 16-19 Kobe University への参加について**

国際舞台でのアピールと、日本語用論の紹介の機会になるので、特別パネル「日本語用論学会パネル」として参加。

Pragmatics of Japanese: Insights and suggestions on Japanese language and education

司会兼コメンテーター：西光義弘

パネル発表者：

1. 名嶋義直（東北大学）日本語 日本語教育（参考 2003. 「ノダカラの意味・機能 - 語用論的観点からの考察 - 」『語用論研究』5, 17-30）
2. 加藤重弘（北海道大学）日本語 語用論
3. 森山卓郎（京都教育大学）日本語 日本語教育

#### Elizabeth Traugott 教授の講演会について

2011年3月に来日され、青山学院大学での講演にあわせて、関西での講演会を現在企画中です。詳細が決まりましたら、ご案内をさし上げます。

#### 談話会活動状況報告

SIG 研究会は、関連性理論研究会が2010年3月31日で2年間の活動を終了しましたので、現在、以下の2つが活動を続けています。

・モダリティ研究会 代表：澤田治美  
研究期間：2009年4月1日～2011年3月31日

・話し言葉の研究会 代表：吉成 祐子  
研究期間：2009年4月1日～2011年3月31日  
以下、各研究会の2010年度の活動計画です。

#### ●「モダリティ研究会」活動報告 2007 年度発足（4年目）

代表 澤田治美

今年度は、関西外国語大学で「言語学談話会」を隔週で開催しており、モダリティに関する研究発表を行っている。談話会では、会員間の交流や会員以外の先生や院生との交流などを通して、様々な視点からモダリティを考察している。今後は、澤田治美、久保進、岡本芳和、長友俊一郎、澤田治、澤田淳、片岡宏仁の各氏が異なる観点からモダリティをとらえた研究発表を行う予定である。

#### ●「話し言葉の分析研究会」2007 年度発足（4年目）

代表：吉成祐子

Deborah Cameron (2001) "Working with spoken Discourse" の翻訳の完成を目指し、その検討会の他、関連テーマについて数回の研究会を実施し、勉強会や研究発表を行う。

新規研究会の申し込みは常時受け付けておりますので、平塚 (hiratuka\_at\_cc.kyoto-su.ac.jp) までお申し込みください。

#### 新刊紹介

- 綾部保志・榎本剛士・小山 亘 2009. 『言語人類学から見た英語教育』東京：ひつじ書房。  
堀江 薫・プランシャント＝パルデシ 2009. 『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』（認知言語学のフロンティア：第5巻）東京：研究社。  
木村大治・中村美知夫・高梨克也（編）2010. 『インタラクションの境界と接続 —サル・人・会話研究から』京都：昭和堂。  
甲田直美 2009. 『文章を理解するとは』東京：スリーイー・ネットワーク。  
西田谷洋・浜田 秀・日高佳紀・日比嘉高 2010. 『認知物語論キーワード』大阪：和泉書院。  
李在鎬 2010. 『認知言語学への誘い』東京：開拓社。  
シルヴァスティン、マイケル 2009. 『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡—シルヴァスティン論文集』（小山 亘・榎本剛士・古山宣洋（訳））東京：三元社。  
山岡政紀・牧原功・小野正樹 2010. 『コミュニケーションと配慮表現 —日本語用論入門』東京：明治書院。  
ディアドリ＝ウィルスン・ティム＝ウォートン 著・今井邦彦編 2009. 『最新語用論入門12章』東京：大修館書店。  
今井邦彦（編）2010. 『中島平三[監修]シリーズ 朝倉＜言語の可能性＞2 言語学の領域（II）』東京：朝倉書店。  
石川邦芳 2009. *Discourse Representation of Temporal Relations in the So Called Head Internal Relatives (Hituzi Linguistics in English)*. 東京：ひつじ書房  
清水崇文 2009. 『中間言語語用論概論 —第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』東京：スリーイー・ネットワーク。  
加藤重広 2009. 『その言い方が人を怒らせる —ことばの危機管理術』東京：筑摩書房。  
加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美（編）『否定と言語理論』東京：開拓社。  
内田聖二 2009. 『英語談話表現辞典』東京：三省堂。  
沼田喜子 2009 『現代日本語取り立て詞の研究』東京：ひつじ書房。  
安武知子 2009. 『コミュニケーションの英語学 —話し手と聞き手の談話の世界』東京：開拓社  
山口治彦 2009. 『(シリーズ言語対照 10) 明晰な引用, しなやかな引用 (シリーズ言語対照 —外から見る日本語)』東京：くろしお出版。  
Abbott, Barbara 2010. *Reference* (Oxford

- Surveys in Semantics and Pragmatics*), Oxford: Oxford University Press
- Bybee, Joan. 2010. *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: CUP.
- Hendricks, Petra, Helen de Hoop, Irene Krämer, Henriëtte de Swart and Joost Zwarts. 2010. *Conflicts in Interpretation (Advances in Optimality Theory)*. London: Equinox.
- Brisard, Frank, Jan-Ola Östman and Jef Verschueren(eds.). 2009. *Grammar, Meaning and Pragmatics(Handbook of Pragmatics Highlights 5)*. Amsterdam: John Benjamins.
- De Swart, Henriëtte 2010 *Expression and Interpretation of Negation: An OT Theory*. Dordrecht: Springer.
- Horn, Laurence (ed.) 2010. *The Expression of Negation*. Berlin/New York: De Gruyter Mouton.
- Sandra, Dominiek, Jan-Ola Östman and Jef Verschueren(eds.). 2010 *Cognition and Pragmatics (Handbook of Pragmatics Highlights 2)*. Amsterdam: John Benjamins.
- Verschueren, Jef and Jan-Ola Östman (eds.). 2009. *Key Notions for Pragmatics (Handbook of Pragmatics Highlights 1)*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jary, Mark 2010. *Assertion* (Palgrave Studies in Pragmatics, Language, and Cognition), New York: Palgrave Macmillan
- Kitazume, Sachiko 2010. *How to Do Things with Humor*. Tokyo: Eihosha.
- Shu, Dingfang and Ken Turner(eds.) 2010. *Contrasting Meaning in Languages of the East and West (Contemporary Studies in Descriptive Linguistics. Vol. 14)* Peter Lang. (LINGUIST List: Vol-21-955. Thu Feb 25 2010.)
- Allott, Nicholas (ed.) 2009 *Key Terms in Pragmatics (Key Terms)*. Continuum International Publishing Group Ltd. (LINGUIST List: Vol-21-931. Wed Feb 24 2010.)
- Van Dijk, Teun A. (ed.) 2010 *Discourse and Context (A Sociocognitive Approach)*. Cambridge. CUP. (LINGUIST List: Vol-21-759. Fri Feb 12 2010.)
- Hansen, Maj-Britt Mosegaard and Jacqueline Visconti 2010 *Current Trends in Diachronic Semantics and Pragmatics (Studies in Pragmatics volume 7)*. Emerald Group Publishing Limited. (LINGUIST List: Vol-21-709. Wed Feb 10 2010)

### 編集後記

この春に新体制になって初めてお届けする Newsletter です。特に、今回新たに運営委員に加わった私は特に右も左もまだわからない状態で、種々不調法があるのではないかと恐れている。今後とも会員の皆さんに御教示を賜りながら、いろいろ覚えていきたいと考えておりま

すので、どうぞ、よろしくお願いいいたします。  
 本号はご覧の通り、昨年 12 月 18 日に他界された小泉保先生の追悼号でもあります。初めて小泉先生をお見かけしたのは言語学会の会長をされていたときでしたから 1980 年代の終わりでしたでしょうか。それから十年して語用論学会が設立され、更に十年余して縁あって私自身も学会のお手伝いをするようになりました。数えてみれば一昔・二昔というところだが、個人的には非常に昔のころのようでもあります。

日本はこの春全国的に天候不順でした。私の住む札幌では、例年よりやや遅れて連休明けに桜が咲くと、ゆっくり楽しみまもなく散り始めてしまいました。自分に桜をゆっくり愛でる余裕がないせいかもしれませんが、もう少し長く咲いていてくれればと毎年思います。北の都市はいまライラック(リラ)の盛りです。

若い頃は、あまり植物に興味がありませんでした。「一本一本の木の名前を知らない人間にとって森は森に過ぎませんが、どの木の名前もわかっている人間にとっては森は単なる森ではありません。だから、ことばの知識が世界知識と結びついているかどうかで、世界の見え方が違うのだ」などと、一般教養の授業で話すこともあります。まさに「森が森に過ぎない」。人間が自分自身だと、最近改めて気づきました。植物が気になり始めたのは、年齢のせい、数年前に本州とは植生の異なる北の大地に住み着いたせい、よくわかりませんが、最近は、ときどき立ち止まっては、草花の観察をしています。

以前なら開花して初めて桜と認識しているだけでしたが、最近では枝振りや樹皮も見て、「こんなところに桜が植わっているぞ」と新たな発見に独りごちています。

しばらく前から目に見える研究成果がものを言う時代になりました。最近では、研究成果を生み出しているだけでは駄目で、「物言う」研究者たる必要があるようです。山梨会長の再任ご挨拶でも触れられている言語系の学会連合は、連携して社会貢献する基盤でもあるとともに、「物言う」学術団体としての意味もあると思われま

す。価値のある研究だと自負していても、価値を発信しないといけない時代です。そういう時代だからか、物言わぬ植物に親近感を覚えるのかもかもしれません。

(ニューズレター編集担当 加藤重広記)